
押入れだけは開けないで

シンイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

押入れだけは開けないで

【Nコード】

N6054Z

【作者名】

シンイ

【あらすじ】

誰にだって秘密はあると思う。でも、私は他人の秘密には興味ないし、知りたいとも思わない。だから、さ。お願いだから。お願いだから、押入れだけは開けないでください。

誰にだって秘密はある

人には誰しも一つや二つ、三つくらいは誰にも言えない秘密を持っているはずだ。現に私にだってある。その秘密は来客があつた時、押入れの中に隠される。恋人ですら知らない、いや、恋人だからこそ絶対に明かせない秘密なのだ。

「ん、今日も可愛いね、ヒバリくん。ダイスケもイケメンだぞっ」

私の声に応えるかのようにするり、とヒバリくんが腕を撫でる。ダイスケは部屋の隅でじつと動かない。時々こちらを見ては興味なさ気にふい、と横を向く。でも、そんな姿も格好いい。ひんやりとしたヒバリくんの体を堪能した私は、名残惜しげに朝の挨拶を終えると、鞆を持って外へ出掛けた。

親元を離れ、1Kのアパートで暮らしている私は一人暮らしではない。大事な同居人がいるのだ。それが、小柄でくりつとした目が可愛いらしいヒバリくん、細長い体が魅力的なダイスケ。勘の良いはもうお気づきかと思うが、ヒバリくんとダイスケは人間ではない。ヒバリくんはヒバカリ、ダイスケはアオダイショウ。虫綱有鱗目へび亜目に分類される、所謂へびである。

そして、この同居人の存在が、大学時代から付き合つて4年になるうかという彼氏に、一度も話したことのない私の秘密なのである。

最近では増えてきたとはいえ、まだまだ一般的にはペットとして受け入れ難い爬虫類。私の周りにもへびは怖いし苦手、と言う人が男女問わず結構いる。こんなに可愛いのに、と思うのは私だけなのだろうか。

私とへびの出会いが小学生の時、かれこれもう15年近くに

なる。あの頃は、まだ実家の近所にも、辛うじて小さな田んぼが残されていた。私は良く友達と学校帰りに田んぼに入っては、ザリガニやオタマジャクシをとって遊んだものである。そして、私をヘビ好きへと変えた張本人、一匹のヒバカリと出会ったのである。

その時のヒバカリがどれだけ可愛かったかは、長くなるので割愛するが、とにかくその日からヘビの魅力に取り付かれた私は、図書室で爬虫類図鑑を借りまくり、ヘビのグッズを集め始めた。そんな私を母親は心配し、弟は変人だと詰った。そして、中学にあがる頃には、親に強請りに強請って念願のヘビを家族に迎え入れたのだ。母親は最後までハムスターやウサギでは駄目なのか、と何度も私に説得を試みたが、絶対にヘビがいい、と譲らなかった。結局、父親が「きちんと世話をするならいいじゃないか」と爬虫類専門店に連れて行ってくれた。ヘビは爬虫類の中でも特に飼育が難しいので、その中でも比較的飼いやすいアオダイショウを飼った。その子がダイスケである。臭いがある、とペットとしての人気は少ないらしいが、成蛇の美しい碧の鱗に惚れ込んで私はこの子にした。初めは、見た目は怖いわ、ネズミを丸呑みするわで戦々恐々としていた家族も、いつの間にか大人しいダイスケの虜になっていた。ダイスケを見て大泣きしていた弟も、自分のヘビが欲しいとコーンスネークを飼い始め、私が高校生にあがった頃には、我が家は自他共に認める蛇御殿となっていたのである。

そんな私の生活はこのヒバリくんとダイスケが中心だ。私の給料は生活費を除くと、ほとんどがこの2匹のために使われている。そして、仕事が休みの日には思う存分愛ヘビを愛でたり、爬虫類館へ行ったりしている。もちろん、誰に言われなくても分かっている。自分でも女としてこれはどうかと思う。

そして、今日出掛けたのもヒバリくんの大好物、オタマジャクシを取りに行く為だったりする。

電車で4〜5駅離れたところの農家にお邪魔して、水田にいるオ

タマジャクシをとらせてもらう。もちろん、ここの農家は無農薬栽培である。長靴を履いて、網で大量のオタマジャクシをクーラーボックスに入れていくOLなど、私くらいのものだろう。それもこれも、体に似合わず大食いのヒバリくんの為である。大漁、大漁とほくそ笑み、クーラーボックスで蠢くオタマジャクシに満足していると、ツナギのポケットで携帯のバイブがぶるぶると震えた。軍手を外して携帯を見ると、見慣れた名前が表示されている。彼氏だ。

「もしもし？ どうしたの？ え？ 今？ 今は……、実家、実家に帰ってる。そんなに遠くないし。家？ うん、うん。ああーまた今度ね。大丈夫、気にしなくていいよ。じゃーね、はいー」

通話ボタンを押し、はあ、と溜息を零す。実家に来たいだなんて冗談じゃない。うちは真正正銘、本物の蛇御殿なのだ。いや、もちろん私にとってはパラダイスだが、彼にとっては違うに決まっている。とても家になんて呼べやしない。彼とは付き合ってもう4年目になるが、まだヘビのことは話したことがない。青々とした短い稲とは対照的に、嘘をついた罪悪感で私の心は鬱々と暗くなっていた。

付き合っているのだから、当然互いの家を行き来することだつてある。しかし、我が家にはヒバリくんとディスクがいる。彼が部屋に来るときは前日から大慌てである。湿気や温度、光に注意しながら、2匹のケースを泣く泣く押し入れの中へ入れる。それから、私のバイブルである『爬虫類大図鑑』や、『蛇の飼い方』などの大量の本やグッズも押し入れに突っ込む。そして、忘れてはいけないのが冷凍庫だ。そこには、ディスク用の冷凍マウスがぎっしり入っている。もちろん、人の食べ物と分けて入れているが、絶対にばれない様に中身の見えない袋で包んで、奥へ奥へと押しやる。これで後は彼を迎えるだけである。

しかし、ヘビという生き物はとってもデリケートだ。長く目の届かない所に押し込めておくのは、とても気が引ける。正直、早く帰ってほしいと思うこともしばしばである。いや、別に彼のことが嫌

いというわけじゃない。こんな私と付き合ってくれる、真面目で優しい彼のことはもちろん大好きだ。別れたくない。だが、ヒバリくんとダイスケも大大好きなのだ。

私だってずっと秘密にできないのは分かっている。でも、ヘビが苦手という人が多いのも事実なのだ。実家ではペットの蛇が増えたことで、近所の人たちから心無いことを沢山言われた。「逃げたらどうするのだ」とか、「小さな子どもがいるのに、咬まれたら責任を取れるのか」とか。中には強い偏見を持っていて、ヘビを飼っているやつを正気を疑う、なんて酷いことを言う人もいた。もちろん飼い主としてどんな責任も負うつもりだし、そんなことには絶対にさせない。それに家にいるのは大人しい気性の子たちばかりで、毒のある子は一匹もない。私たち家族は何度もそう訴えて、近所の人たちにも沢々納得してもらった。

そんな経緯があるものだから、もし彼にダイスケたちのことを話したら、別れようと言いだされてもおかしくない、と私は思っている。そうなった時のことが怖くて、私はずっとペットのことを彼氏に言えないままなのである。

アプローチは突然に

本日の勤務も無事終わり、私は一人駅前のレストランへと向かう。土曜の出勤日は、彼氏といつもそこで待ち合わせているのだ。私の会社は月に3回ほど、土曜日は午前のみ出勤の日がある。携帯に何も連絡が入っていない時は、自然とここで待ち合わせるようになっていた。このレストランには外テラスがあり、その一番奥の席が私たちの定位置になっている。大きな木々に囲まれた木陰の中だから、風がとても気持ちいいのだ。ただ空調が整っていて、清潔感のある店内の方が人気なので、外はガラガラに席が空いている。私はやって来た店員からメニューを受け取ると、開いて今日のお昼を吟味する。今日は何を食べようか。

すると、ぶるぶると携帯が震え、同期の友達から電話が掛かってきた。

「やほー。お昼一緒に食べない？ ってごめん、今日は彼氏とか」
私が土曜のお昼は彼と一緒に取っていることは、同期の女子のほとんどが知っている。彼女は自分で突っ込むと電話の向こうでぐくりと頂垂れたようだった。

「あーあ、あたしも彼氏ほしーな」

「いつも、何人かで食べてたじゃん。皆は？」

私がそう尋ねると、彼女はますます意気消沈した。

「それがさー、問題があつたらしくて終わらなかつたとか、男と食べる、とかであたし一人なのよう。独り飯とかチョー寂しいんですけど」

彼女は電話の向こうで、「ないわー」と呟いた。それに苦笑すると、私は再びメニューに目を通した。よし、日替わりランチにしよう。今日は野菜たっぷりコロッケにスープとデザートが付くらしい。「そっいえばあんたって自炊できるの？ 平日はいつも社内食堂だし、土曜は外で食べてるんでしょ？」

「や、だって時間ないし」

自慢じゃないが、私は学生時代から手作り弁当なるものを持ってきたことは、この6年間一度も無い。料理はできなくも無いが、弁当作る時間があるなら、私はヒバリさんとダイスケを愛でる時間に充てる。まあ、休みの日くらいは彼氏に振舞ったりはするが、平日の朝は2匹とコミュニケーションを取れる貴重な時間帯なのだ。

「ふうん。朝が弱いタイプには見えないのにねー」

友人はそう言うと、「じゃ、あたしもお昼食べて来るわ。独りで！」と通話を切ってしまった。寂しい寂しいと言ってはいるが、あの子は一人でも平気で牛丼屋に入れる女なのは重々承知だ。きつと一人でも牛丼なりラーメンなり涼しい顔で食べるのだろう。私は店員にアイスコーヒーだけ注文して、彼氏が来るのを待った。

休日なだけあって、店内は若いカップルや友達同士が目立つ。ガラスの向こう側の、可愛らしく着飾った女の子たちを見ながら思った。さっきの話ではないが、私の女子力はかなりヤバイ。別におしやれは好きだし、メイクだって人並みにはする。ただ、それが私にとって一番ではないので、学生時代から毎朝時間をかけて髪を巻いたり、丁寧に爪を磨いてツヤツヤにしたりという事はしてこなかった。

「ごめん、ちょっと遅れた」

ふとテーブルに影がかかって見上げると、私の彼氏のお出ました。背も高く、顔だって悪くない。今時のチャラチャラしたところが一切無い、清潔感溢れる好青年だ。白いシャツをカジュアルに着こなしてしまふ彼は、私の自慢の彼氏である。本当、容姿も頭も平々凡々な私と何故付き合っているのか。彼女の私が言うのもなんだが、不思議でしうがない。

「いいよ、私も大して待つてないし」

お互い社会人にもなれば、時間が合わないことなどしょっちゅうだ。いつもは私が待たせる方なので、別にこれ位の遅刻など気にならない。彼が向かいに座ると、メニューを渡して店員を呼ぶ。彼は

この店おすすめのチキンカツを頼んだ。ポリウム満点なので、男性に大人気である。

ランチの時はいつも午前中の話とか、この後何をするだとか、とりとめの無い話をしている。途中、おいしそうだったので彼のカツを一切れ貰うと、彼は私のコロツケを丸々1個持っていった。2個しかついてないのに。くそう。

「そうだ、今公開してる映画で見たいのあるんだけど、この後行かない？」

そろそろコロツケも無くなるだろうか、というところで私が誘うと、彼が少し緊張した面持ちで私を見た。

「映画もいいけど、その前にちよつと公園で話をしないか？」

「え……？ いいけど、ここじゃ駄目なの？」

彼は「ああ」と頷いた。改めてする話とはなんだろう。まさか、ここにきて別れ話というやつだろうか。ありえる。私は世間一般で言う『いい彼女』では無かった。どうしよう、と不安になる私を置いて、

「じゃあ、それ食べ終わったら行くよ」

と、彼はなんでもないうにカツレツを食べ終えた。その後、私は残りのコロツケをどう食べきったのか、まったく覚えていない。

遊歩道が完備された駅前の公園は、自然も豊かで一日のんびり過ごしたい人には最適の場所だ。私たちも良く昼食の後にふらつと寄って、ずつとおしゃべりしたり、ごろごろしたりと利用していた。カフェやレストランと違って周りにいる人を気にすることも無い、外に居ながら二人つきりを感じられる場所だ。そこで話そう、だなんて本当に何の話をするつもりだろうか。

公園に入るとまず、グニャグニャとした抽象的な黒いオブジェが目に入る。この公園には、あちこちにいくつものオブジェが置かれているのだ。どれも著名な作家が造ったものらしいが、抽象過ぎて私には何がすごいのかさっぱり分からない。ただ目印にはなるので、

入り口から一番近いこのオブジェは待ち合わせの場所としていつも賑わっていた。

私たちは自然といつもの散歩コースを歩いていく。大きな花壇には、紫、黄色、白など色とりどりのパンジーが咲いていた。その花壇の前を通り過ぎて、彼は開いているベンチに腰を下ろした。私も彼の隣に座る。

「その、さ」

彼が口を開いた。一体何が飛び出すのか。私は緊張で強張る表情のまま彼を見つめた。気分はまな板の上の鯉である。もう、別れ話でもなんでもどんと来い。いや、その時は泣くけど。きつと。

「あ……その、そろそろ一緒に暮らさないか？」

さあ、何が出るか、と息を詰めた私は耳を疑った。低い彼の声が耳のずつと奥の方で何度も反芻する。一緒に暮らさないか、だと？

「え？ それって……」

「だから、同棲しよう」

彼は私の両手をすつと握って、真っ直ぐ私の目を見つめた。彼の黒い瞳に、呆けた表情の私が映っている。

「本当は卒業したらすぐそうしようって思ってたんだ。ただ、お互い去年は新しい生活でバタバタしてただろ？」

生活費とか、色々決めなきゃならないことはたくさんあると思う。でも、やっぱり先のことを考えて、そうした方が良いんじゃないかと思うんだ。もちろん、ご両親にも挨拶に行く。……だから、良く考えておいてくれ」

彼の真摯な視線が私の目を射る。「……はい」と、か細く頷くと、彼は私の手を引いたままゆっくり立ち上がって、

「映画は今度にしようか。大事なことから家でよく考えて、君の考えを聞かせてほしい」

と、そのまま家まで送ってくれた。私は彼に手を引かれるまま自宅に帰り着き、彼を見送ると、しばらく夢のようなぼんやりとした時間を送っていた。

女の部屋の押入れは、許可無く開けてはいけません

彼から同棲を持ちかけられて一週間。私は嬉しさと舞い上がった
り、かと思えば反対に沈みきつたりと忙しい日々を過ごしていた。

もちろん仕事に支障をきたすようなことはしないが、それでも同期
の友達や、女性の先輩にはバレバレだったと思う。同期の友達から
は、「どうする？ パーッと飲んで忘れる？」と言われたけれど、
それはどういうことだ。別れ話ではないから。しかも、先輩にはこ
つそりと「寿退社はもうちよつとだけ待てない？」と言われた。残
念ですが、それも違います。

嬉しいのは嬉しい。先のことも考えて、と言うのだから彼はいろ
いろ考えてくれているのだと思う。今まで全然そんな素振りが無か
ったから、吃驚してしまった。真剣に思ってくれるのが嬉しくて、
本当に感動したのだ。でも、その反面憂鬱になる。私は押入れをそ
つと開けて溜息をついた。

この子達を疎ましく思うのなんて、人生で初めてじゃないだろう
か。だからといって実家に預けるのも嫌だ。愛情が無くなったわけ
では無いから。押入れに入れられた所為か、どこことなく私を見る目
が冷たい気がする。

「ごめんね。今日もちよつとだけここで我慢してね」

ダイスケは週に一回マウスをあげればいいので大丈夫だとしても、
ヒバカリのヒバリくんは一日おきに餌をあげなくてはならない。さ
つきたつぷりあげたからお腹が空くことはないかもしれないけれど、
やっぱり心配だ。黒いまん丸の二対の目が私をじいとする。そ、そ
んな目で見ないでくれ。閉めにくいではないか。

ピンポン、とチャイムが鳴らされて、私は「ごめんね」と2匹
に呟き押入れを閉める。玄関を開けると今日も爽やかな彼が立っ
ていた。

「いらつしゃい。どうぞー」

「ん、お邪魔します」

私にとっては、今の彼がほとんど初めての彼氏と言っても良い。なので、世間一般の彼氏彼女が、普段どんな風に二人の時間を過ごすのかは知らないが、私たちの場合はひどくまったりとしたものだ。雑誌や本を読んだり、借りてきたDVDと一緒に見たり、それから恋人らしいことをちよつとだけする。そんな感じた。

「あれ？ そんな雑誌読んでたっけ？」

「……仕事で必要」

彼は持参した車関連の雑誌をパラパラと捲っている。彼専用のマグカップにミルクだけ入れたコーヒーをミニテーブルに置くと、私は自分のコーヒーを口にした。うん、甘い。私も雑誌でも読もうかな。ぶつちゃけ、彼がいる時じゃないと女性誌なんて読まないし。何か面白い特集ないかな、と捲っていると彼が口を開いた。

「いつも思ってたけどさ、この部屋あんまり物無いよね」

「え？」

たぶん、彼は何でもないことを話したんだろうけれど、私はその言葉に大いに焦った。普段1Kのアパートには、ダイスケとヒバリくんのケースや蛇グッズが置かれている。それを全部押し入れに入れたから、妙に部屋がすっきりしてしまったのだ。残ったのはタンスやカラーボックス、テレビ、ミニテーブル、ソファ、ベッドぐらの必要最低限で、女の子の部屋としては物が無さ過ぎる。友達の部屋も、もつと細々としたものや美容グッズ、可愛い小物で埋め尽くされていた。

「そ、そうかな？ 私あんまりごちゃごちゃしてるの好きじゃないしさ」

「知ってる」

ですよね。ちよつと冷や汗をかいた気分だ。

「俺の同僚がさ、最近できた彼女の部屋が全部ピンクで、しかもヒラヒラしてて入りづらいつて言うんだ。俺は居心地悪いとか感じたこと無いから、よく分かんなかったけど」

へえ。まあ、たまに同性から見てもすごい部屋の子はいるからね
可愛いものに囲まれたいって気持ちは分かるけど、男の人にはきつ
いだろうな。

「私の部屋は？」

「……俺の話聞いてた？」

聞いてたけど、直接聞きたいではないか。私が期待した目で見つ
めると、彼は、ちゅつと私のおでこに口付けて「すぐ落ち着く」
と言った。これは予想外。照れくさくなって俯くと、彼はくすくす
と笑った。その様子を見て、一抹の不安がよぎる。嬉しいけれど、
やっぱり怖くなってしまふのだ。この部屋に蛇ちゃんがプラスされ
ても、同じことを言ってくれますか。

「……この間の話。ちゃんと考えてくれた？」

考えましたとも。だから、私はとても困っている。一緒に暮らし
たい気持ちは山々だが、その前に彼には私の同居人を紹介しなくて
はならない。彼らを受け入れてもらえるか分からないから、私は何
年も二の足を踏んでいるのだ。

「この間にはつきり言わなかったけど、これは結婚前提だから。お
互いの生活パターンとか、歩み寄らないといけない部分とか、先に
知っておいた方がいいと思うんだ」

「け、結婚」

やっぱり考えてくれてるんだ。いつの間にか閉じ込められた腕の
中で、ぎゅ、と彼のシャツを掴む。駄目だ、恥ずかしくて顔が見れ
ない。すると、背中に重みがぐつと加わって、不機嫌な声が耳元で
囁かれる。

「……俺以外でその予定でもあるの？」

「え？ ない！ ないない！！」

慌てて後ろを振り向くと、険難な目をした彼が私をじりと睨ん
でいる。珍しい。意外と淡泊な面を持っている彼は、あまり負の感
情を表に出さない。だから、間近で見る彼の仏頂面は中々に迫力が
あった。

「会社に格好良い人でもいた？」

「いいいい、いません！　あなただけですとも、私には！」

私みたいな洒落っ気の無い女、相手にするのは本当にあなたぐらいです。ぶんぶんと手も首も横に振ると、彼はくすり、と笑ってまた口付けてくれる。今度は私の唇に。

「良かった」

ふわ、と笑う彼には、もう先ほどの不機嫌さはすっかり消え失せていた。もしかして、私の反応を見るための演技だったのだろうか。まさかね。

「じゃあ、何で渋るの？」

「ええつとー……」

「ちよつと前に、アパートの契約もうすぐ切れるって言ってたよね。いい機会だと思ったんだけど……」

確かに二年の契約がもうすぐ切れるって言ったけど、それ以前に重大な問題があるわけでした。ぐいぐいと背中の中の重みが増してくる。滅多に甘えない彼が、何故か今日は甘えた。仕事に必要な雑誌見てたんじゃないのか。

「ちよつ、重い……」

「昔から中々部屋に入れてくれないし。家来るときは先に連絡してつて、俺が来る前に何してるの？」

またご機嫌が斜めになりだした彼が、重さと共に不満を私に乘せてくる。当然だけどやっぱり不審に思ってたんだ。何をしてるかっで、決まってる。私はちら、と押入れを見た。それに釣られて彼も押し入れの方を見る。「そっいえば、そこ開いてるとこ見たことないな」と、彼が立ち上がる。どうしよう、今、言ってしまうのか。押入れにペットの蛇を隠してますって。そうだ、丁度いい機会じゃないか。言ってしまうおう。

「……そ、掃除。掃除をしました……」

（私の馬鹿！！）

押入れに手をかけた彼が、ぼかんとした表情で私を見る。私だっ

て意味不明だ。どうして、こんなことが口から出たんだ。いや、あながち間違いではないのだけれども。

「す、すつごく汚いの。それはもう！ ビックリするくらい！」

「……別に気にしないけど。こうして片付けられてるんだし。もしかして、ここに全部突っ込んでんの？」

す、鋭い。彼の興味が再び押入れに移る。って、だからそこは開けちゃ駄目だつてば。私はその前に立ち塞がった。

「駄目だつて、本当！ お、女の子には見られたくないものが、その、一つや二つ、三つ、とにかくあるわけです……。雪崩れてくるから、勘弁してください……」

彼はしばらく私と押入れを見比べて溜息をついた。「そうだな。ごめん」と言つてソファに座る。再び雑誌を読み始めた彼の隣に座つて、「ごめんね」と呟いた。彼は、申し訳なさでいっぱいの私の頭を優しく撫でてくれた。

類は友を呼ぶか

ひやりとした滑らかな鱗が私の腕を撫でる。無重力を感じさせるその動きで、ダイスケの頭が私の首もとに近づいた。

現在、私はダイスケと戯れ中である。前回は彼氏が来たから、この休日はダイスケとヒバリくんの為に使おうと思う。碧色の鱗をそっと撫でれば、首元を一周したダイスケがちろりと舌を出す。か、可愛すぎる。

押入れに寄りかかり、私は自分の部屋を見回してみた。十一畳の間は南向きで、小さなベランダが付いている。先週彼氏が来た時に押入れに押し込んでいたものは、全て出されて、それなりに生活観を出していた。うん、これでこそ私の部屋である。

私は窓の側に置いておいた冷凍マウスをピンセットで摘み上げると、ケースの中に入れる。もちろん、充分解凍済みだ。そして、私の腕に巻きついていたダイスケをそっと離して、ケースに入れてあげる。あとは、じっとダイスケがマウスを食べるのを見守るだけだ。しかし、ヘビ好きでもこの給餌がネックだと私も思う。初めの頃は私も結構抵抗があったのだ。なにしろ、ヘビの餌は総じて生き物としての形が残っているものばかりだ。小さな虫でキヤーキヤー大騒ぎなら、絶対無理だと思う。もう慣れたし、なんとも思わないけどね。おかげで高校の時は、解剖の授業でも騒ぐ同級生たちの中、一人さっさと始めてしまったこともあったけど。実験は丁度四限目で、その後のお昼は皆食べる気がしない、とお弁当に手をつける子は少なかった。もちろん私の食欲は減退なぞしなかった。友達からは、鋼の精神と言われたけど、単に慣れである。

すると、ミニテーブルの上に置いてあった携帯がチカチカと光り出した。私は家ではいつもサイレントモードに設定している。大丈夫だとは思うが、あまり二匹には刺激を与えたくないなので、念のため。手にとって見ると、友人からの電話だった。

「もしもし？ どうし——」

「聞いてよー！！ 加藤神社行ってきたのさ！！ いやー、もう満足満足」

耳に当てるまでもなく、興奮した声が携帯を通して聞こえてくる。うん、これもいつもの事だ。高校時代からの付き合いであるこの友人は、時折こうして電話をかけてくる。大抵、それは連休が取れた後の話で、どこどこでこれこれを見てきたという報告だ。

「加藤神社？ どこよ、それ」

「熊本、熊本。はあー、また行きたいなあ」

熊本まで行ってきたのか。普段はあまり外出しないのに、本当、趣味が関わるとバイタリテイ溢れるのだから凄い。まあ、私も人のことは言えないのだけれど。

「誰が縁なの？ えっと、真田なんちゃら？」

「違う！！ 加藤清正！ 真田幸村は過去の男だ」

誰だそれは。というか、過去の男って言い方はどうかと思う。その真田くんが可哀想ではないか。

私の友人は所謂「歴女」というやつである。私はあまり日本史には興味なかったから、武将の名前とかすっかり忘れてしまったが、彼女は何十人という人物をこと細かく記憶している。ちなみに、私がつばら力を入れて勉強したのは生物だ。二年からは理数系クラスへ進んだから、私の日本史の知識は中学時代で終わっている。

「あんだでも、豊臣秀吉は知ってるでしょ？ その子飼いの一人が、清正なの」

馬鹿にするな。秀吉くらいは知っているわ。まあ、その子飼いやらまでは、流石に知らないけれども。そして、友人は電話の向こうでマシガンのように清正の蘊蓄を語っている。私はそれを話半分で聞きながら、視線はディスプレイに向けていた。ディスプレイは与えたマウスに鼻を寄せて、臭いを嗅いでいる。よしよし、そのままパクリと喰らいつけ。しかし、ディスプレイはぷいと横を向く。あれ、食べないのか。まあいい。蛇の給餌は待つことが大事だ。忍耐の女でな

くてはならない。この友人の電話に付き合っただけのように。

「ねえ、聞いてる？ それでね、向こうであつた子は小西行長が好きって言うのよ。だから、あたしもさあ——」

聞いているよ、と返せばまた話し出す。本当は、半分も頭に入っていないのだけれど、それでいいのだ。「聞いて」いれば友人は満足するのだ。別に彼女は、私の感想や意見を求めているわけではない。ただ、相槌を打って、友人の興奮した感情を受け止めてあげる。全部を頭に入れようとする、こつちがパンクしちゃうし、向こうも一方的に話している自覚はあるからね。

「ああースッキリ。ごめんね、詰まらない話だったでしょ？」

「ううん。私もダイスケたちのことになると思わないからね。これくらい、お安い御用ってやつさ」

そして、漸く会話らしい会話が始まって笑い返せば、それもそうね、と向こうも笑う。彼女は私が蛇好きであることを知っている、数少ない知人の一人である。つまり、家族以外で、ペットについて話せるのは彼女くらいなのだ。だから、こんなやり取りは本当にお互い様。

「今家にいるの？ ダイスケくん元気？」

「元気だよー。今丁度マウスあげたとこ。あ、ちょっと待って。食べた」

じつと見ている先でダイスケがマウスを一呑みにした。ゆっくりと、マウスがダイスケの体を降下していくのが見て取れる。これ以後一週間は持つはずだ。私は満足して、「おいしかったー？」とケース越しに聞けば、電話の向こう側から溜息が聞こえた。そういえば、繋がっていたのを忘れていた。

「食べたってネズミ？ うわー、ハム飼ってる人間に言う台詞か。ってか、相変わらずだね。彼氏ほっぽってダイスケくん？」

「ほっぽってないし。この間だって、同棲しようって言われたばかりだから！」

むっとして言い返せば、瞬間しまった、と思った。余計なことを

言ったと思っても後の祭りで、友人が電話の向こうでどんな顔をしているか、簡単に想像できる。きっと猫のように目を細めて、にたりと笑っているに違いない。

「あらー、初耳ですことよ。黙ってるなんて感じ悪いわねえ。……全部吐きなさい」

先ほどまでの小鳥のような声はどこへやら。どすの利いた声が電話越しにもたらされる。口が滑った自分が悪いと諦めて、私は事の詳細を友人に話したのである。

「なるほどねえ。ちゃあんとあんたの事考えてんじやない。今時いいいわよ？ 同棲するのに家族に挨拶したい、なんて言う男」

洗いざらい全て吐かされて、げっそりしている私に友人はそう言った。彼に対する感情が充分に感じられる言葉に、私も頷く。鼻根目抜きにいい男なのだ、本当に。

「いいじゃない。彼ならご両親も反対しないだろうし、そのまま同棲してゴールインしちゃいなよ」

「でも……」

私だつてそうしたい。しかし、渋る答えにこの友人はまた感づいたようだ。

「あんた、まさか……。まだペットのこと話してないわね！！」

ああ、やっぱり。七年以上付き合いのあるこの友人は騙せなかった。前々から早く話せと言われ続けていただけに、耳が痛い。「馬鹿馬鹿馬鹿」と友人が憤慨している。愛の鞭だと思って、私はそれを甘んじて受け止めた。

「なんで、もう！ いい加減話しちゃいなさいよ。ああそう、くらいにしか思っていないわよ」

「んなわけ無いじゃん！ 高二の時、なんで別れたか知ってるでしょ！！！」

私がそう叫ぶと、友人は「あ」と口を噤んだ。

私は今の彼の前に一人だけ男と付き合ったことがある。それが、

高校二年の時だ。まだまだ私は子どもで、相手もそうだった。手をつないだりデートをしたり。仲も良かった。彼が家に来たい、と言うまでは。

もちろん、その意味するところをなんとなく気付いていた私は、家族が皆出かけている日に彼を招いた。初めはお互い緊張しつつも照れくさく、それでもわくわくとした高揚感で一杯だった。そのまま私の部屋へ直行するはずだったがしかし、彼はたまたま開いていたドアの隙間から居間を覗き見てしまった。「わあ！！」と大声をあげた彼はそのまま硬直し、驚きに染まった表情で私を見る。

「ああ、ペットだよ。見る？」

みんな大人しくケースに入っているから大丈夫だろう、とドアを開けて居間に入る。実は、その時家の蛇の数は最盛期で、自分の家が傍から見れば蛇御殿だということを私はすっかり忘れていた。しかも、偶然とは重なるものだ。茶色の三人掛けのソファの上に赤い体に黒の輪っか模様。一匹のブラジルレインボーボアがいたのだ。この子のケースを見れば、蓋が外れていた。大方弟だろう。危ない所だったと持ち上げれば、後ろでひゅつと息を飲む音がした。どうしたのかと後ろを見れば、居間の入り口で彼がぱくぱくと口を開いたり閉じたりしていた。確かにこの子はメートル越えでちよつと大きい、大人しくて飼いやすい種類だ。怖がることも無いと、「触ってみる？」と聞いたら、勢い良く首を横に振られた。そしてそのまま、「俺、用事思い出した。帰る」と飛び出すように家を出て行ってしまったのである。私は抱き上げたボアを撫でながら残念な気持ちで一杯だった。ツルツルとしたこの子の鱗は、光を反射して玉虫色に光る。その名の通り、美しい蛇なのに。

結局、次の日に私は別れを告げられたのである。

四年目のリサーチ

今流行の海外ファンタジー映画を見終わった私と彼は、そのままデパートの中をぶらぶらとショッピングしていた。

彼も私もDVD派なのだけど、やっぱり3Dは映画館で見ないとね、という訳で外に出てきたのである。社会人になってから外でデートなんて久しぶりだから、私なりの精一杯でおしゃれをした。ワンピースだって卸したてだし、メイクも仕事用とはちよつと変えてみた。私の精一杯なんて世間ではほんのちよつとなんだろうけど、待ち合わせ場所で「うん、いいんじゃない」と、彼は私を見て言ってくれたから、もうそれだけで今日は幸せだ。

「どこか見たいところある？」

彼がエスカレーターを降りながらそう聞いてきた。そうだなあ。

食事するにはまだ早いし、かといって欲しいものもない。メンスも置いてあるお店で服とか見るのがいいかな、と考えていたら、降りた階の正面に見慣れないペットショップがあった。

「ここ、前は違う店じゃなかった？」

「ん？ ああ、店舗入れ替えたみたいだね。見てく？」

店内に張られた「NEW OPEN」のチラシを見ながら、彼はそう言った。私は「うん」と頷いて彼と二人ペットショップへ向かう。

新しくできたペットショップは、私の知っている中ではかなり大きい方で、フロアの半分ほどがこのお店のエリアになっていた。人気のある犬や猫だけでなく、ウサギやハムスターなどの小動物、インコなどの鳥類や熱帯魚まで種類も豊富だ。そして、私が心惹かれる爬虫類コーナーもばっちりある。このペットショップ最高じゃないか。

ついつい私の視線が奥の爬虫類コーナーへ向いてしまった間に、彼の興味は可愛い子犬へと向いたらしい。ちよんちよんと私の

袖を引いて、あれあれと指をさす。彼が指をさした方を見れば、ガラスケースの向こう側で愛らしい子犬がごろごろと転がっていた。

「わ、可愛い」

「だろ？ もっと近くで見よう」

彼は私の手を引いて、ガラスケースの前までやってきた。黒い柴犬がとてとてとケージの中を元気に動き回っている。隣のケースではマルチーズだろうか。こちらはおやすみ中だ。さらにそのガラスケースの向こうでは、丁度ブリーダーさんがトイ・プードルを連れてきて、カットするところを見せていた。

ふと周りにも目を向ければ、ケースの側には私たちの他にも家族連れや、カップルが何組かいて皆にこにこと幸せそうだった。私たちもそう見えているのかな。そうだといいな、なんて思いながらまた彼に視線を戻すと、彼は黒柴に夢中だった。どうやらその子がベストヒットしたらしい。目が輝いている。

「その子、気に入った？」

「気に入った。くそー、飼えればいんだけどな……」

心底悔しそうにしている彼に私は笑みを零す。確か、今彼が住んでいるマンションはペット禁止だったはずだ。可哀想だが諦めるしかないだろう。

「犬がいいの？ 猫とかは？」

しかし、これはチャンスと私は探りを入れる。哺乳類から徐々に爬虫類へいけばいいだろう。四年も付き合って今更だが、避けていた話題なんだから仕方ない。それに、これで爬虫類も好きだ、もしくは大丈夫だということが分かれば僥倖じゃあないか。

「猫？ 猫もいいよね」

なんて彼はすぐ隣の子猫のケースにも目を向けた。好奇心旺盛な子猫たちが、集まる人間たちを不思議そうにじっと見つめていた。

「じゃあ、鳥とかなら飼えるんじゃない？」

「飼えるだろうけど……。やっぱこいつだなあ」

鳥類はどうだっ、と聞いてみたが、やはり気になるのはこの子犬

のようだ。だから、マンションじゃ飼えないんでしょって。

「そういえば、今まで何か飼ってたことあるの？ 聞いたこと無かったけど」

「そうだったけ？ 金魚くらいだよ。縁日の」

金魚か。ヒバリくんの餌にしていた時期もあったな。結局ヒバリくんは食べなかったけどね。私が少し遠い目をする、彼は「ん？」と首を傾けた。慌てて何でもないよ、と言うと、「そう？」と彼はまた子犬に視線を戻した。

「じゃ、じゃあさ……、その……」

ここで私は、爬虫類はどうか、と彼に聞こうと口を開いた。しかし、これが中々勇気のいることで、その、の先が上手く言えない。私今、告白したとき並に緊張しているんじゃないだろうか。「えーと」なんて意味の無い言葉を繋げている内に、彼の興味はまたしても別のものに奪われてしまった。

「あ、ねえ。成犬は触らしてくれるって。行ってみよ」

「え？ あ、ちょっ——」

柵で囲まれたスペースがあると思ったら、犬と触れ合う為の場所だったのか。店員さんが何頭か成犬を連れてきて、そのスペースの中に入る。誰でも自由に中に入って触らせてもらえるらしい。彼はまた私の手を引っ張ってその柵へと近づくと、店員さんに断って中に入れてもらった。もちろん私も一緒だ。彼は嬉しそうに、ゴールデンレトリバーの頭をぐりぐりと撫でている。その顔を見ているとなんだかまあいいか、という気になって、私は今蛇のことについて質問するのを諦めた。

しかし結局、その後も犬の話で持ちきりになり、他の話題といえ、食事の時に今日見た映画の感想を話すくらいだった。せっかくのチャンスだったのに、私は彼が蛇をどう思っているのか、聞く機会を逃してしまったのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6054z/>

押入れだけは開けないで

2011年12月21日05時55分発行